

京都大学総合人間学部広報

特集 2011 年度 オープンキャンパス

オープンキャンパスを終えて	森谷 敏夫	3
漢文と中国文学の間—	道坂 昭廣	4
石は地球の覗き窓	小木曾 哲	6
夢を見る意味	新宮 一成	8
知られざる西域		
—トカラ語の未解読文書から浮かび上がるオアシス都市の姿—	齋藤 治之	10

オープンキャンパス学生企画より

感謝	奥田 俊介	12
面白そうじん・楽しそうじん	新井 翔太	14
総人サイクリング	萩原 広道	16
クイズコーナーと SASUBE 君コーナー	松村 雅治	18
2011 年度総合人間学部オープンキャンパスの開催を振り返って	棚田 史彦	20

新任教員より

記憶に残る京都生活に	月浦 崇	22
夏の山西フィールド調査	小島 泰雄	23
アフリカの土器づくりからみえること	金子 守恵	24
新任の挨拶	佐野 亘	25
エネルギー変換分野の新規開拓を目指して	折笠 有基	26

特集 2011 年度 オープンキャンパス

オープンキャンパスを終えて

森谷 敏夫（認知情報学系）



「ようこそ、京都大学総合人間学部オープンキャンパスにお越しいただきました。」

総合人間学部は京都大学の中で唯一、文系、理系の学問領域を統合的に学べる学部です。凄まじく流れ動く現代社会の中で、今、最も必要とされている独創性や学際領域を超えたインターフェース的な能力を育てるところが、総合人間学部であると思っています。教員スタッフも文系、理系を代表するすばらしい先生方がキャンパス狭しと教育、研究活動を展開しています。今日はその雰囲気をもっと味わえるように、総合人間学部を代表するような先生方の「模擬講義」を始め、文系、理系の先生方の「研究室公開」、「学部説明会」、教員や学部生と直接会話が出来る「相談コーナー」、パネル展示や教員の著書の展示による「総合人間学部紹介コーナー」、更には総合人間学部生が企画した「学生企画」では、京大のチアリーディング、ジャグリングの演技や参加賞や景品がもらえる「クイズ企画」も用意して皆様のお越しを待っております。総合人間学部オープンキャンパス委員長として、今日一日皆様とともに楽しく、有意義な時間を過ごせることを祈念しております。」（総合人間学部オープンキャンパス挨拶文から）。

実際幕を開けてみると2時間前から行列ができ大盛況であった。今年は記録的な参加者で、1737名が総人キャンパスを訪れた。陣頭指揮の小生はうろろ見回りをやっていただけたが、事務職員の方々や総人の学生さんたちの準備と実際の運営には頭が下がる思いである。特に学生諸君の企画や丁寧な対応の裏には、全国的に知名度のまだまだ低い「総合人間学部」を猛烈にアピールしたいとの熱い思いが感じられた。教養部から大学院の基幹講座に移り、その後の総合人間学部創設から余り直接的な関与がなかったが、このオープンキャンパスをとおして、やっと人環と総人が自分のアイデンティティとして融合し、快く体の中に溶け込んだ、うれしい瞬間でもあった。

（もりたに としお）

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
実行委員長

漢文と中国文学の間

道坂 昭廣 (国際文明学系)



中国古典文学の一部は実は高校でも「漢文」として既に学んでいる。「漢文」が国語科に属するように、高校では日本文化の一環として学ぶが、大学では外国文学として読

解するのである。具体的に言うと、同じ作品でも、高校は漢文訓読という翻訳で読み、大学では中国語で直読する。

残念ながら漢文は人気の無い教科のようだ。その原因の一つに、訓読という読み方があることは間違いないだろう。漢文訓読が日本文化と日本語に果たした功績についてはここで述べる余裕はないが、現代高校生とは逆に、明治の頃まで、訓読は日本人にとって、慣れ親しんだ文体であった。そのため中国古典文学を外国文学として見る観点をともしれば失いがちであった。外国の文学をその国の言葉で読む。当たり前のことであるが、日本において難しかった。しかし、中国語で音読することによって、訓読という翻訳では隠れていたものが浮かび上がってくることもある。

高校生にも馴染みのある『三国志』の英雄の一人、曹操の「短歌行」という詩を例に考えて見よう。

* * *

対酒当歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。

酒に対しては当に歌うべし、人生幾許ぞ。

譬えば朝露の如し、去ぐる日は苦多し。

慨当以慷、憂思難忘。何以解憂、唯有杜康。

慨して当に以て慷すべし、憂思は忘れ難し。

何を以て憂いを解かん、唯だ杜康有り。

青青子衿、悠悠我心。但為君故、沈吟至今。

青青たる子が衿、悠悠たる我が心。

但だ君が為の故に、沈吟して今に至る。

呦呦鹿鳴、食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟吹笙。

呦呦として鹿鳴き、野の苹を食らう。

我に嘉賓有り、瑟を鼓し笙を吹く。

明明如月、何時可掇。憂從中來、不可断絶。

明明たること月の如きは、何時^{ひろ}掇う可けんや。憂は中従り来り、断絶す可からず。

越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念旧恩。

陌を越え阡を度り、枉げて用いて相い^{かえりみ}存らる。

契闊 談讌すれば、心に旧恩を念う。

月明星希、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可依。

月明らかに星希れに、烏鵲 南に飛ぶ。

樹を繞ること三匝、何の枝に依る可き。

山不厭高、海不厭深。周公吐哺、天下歸心。

山は高きを厭わず、海は深きを厭わず。

周公 哺を吐き、天下 心を帰す。

* * *

下に訓読を付した。訓読には独特のリズムがあり、そのリズムによって醸し出される雰囲気がある。その為、何となく分かったような気持ちになってしまう。しかし、よく読んで見ると、この詩は

飛躍が大きく、論理の一貫性に欠けるように思う。ところで、これを中国語で読んでみると、4句ごとに改韻されていることに気付く。韻文は往々にして韻が換わると話題も換わる傾向をもつということ、「短歌行」が民間の歌謡に由来する樂府という詩であるという要素も考えあわせ、この詩は主人公（曹操）と客役（部下）が交互に歌ったのではないかという、極めて魅力的な説がフランス人学者によって唱えられた。音読することによって発想された説と言える。

最近の映画『レッドクリフ』に至るまで、「短歌行」は、曹操が赤壁の戦い前夜、劉備・孫権連合軍と対峙する長江沿岸の陣営で詠ったとされる。残念ながら歴史書に、そのような記録はなく、＜事実＞ではないかもしれない。この新説は、事実を裏付けるものでもある。ただ、「短歌行」の伝承は、武将でありかつ優れた詩人でもあった曹操という人物の＜真実＞を伝えてはいる。漢文訓読のリズムも、詩の昂揚した雰囲気をよく伝え、その意味では、曹操という人物の＜真実＞を映しているように、私には思える。

漢文訓読という読解法を大切にしながらも、外国文学として中国古典文学作品を読む。そのことによって古典は新しい発見と意義を持つのではないだろうか。

（みちさか あきひろ）

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
模擬講義Ⅰ担当



「赤壁の戦い前夜、「短歌行」(?)を詠う曹操」
（『李卓吾先生批評三国志』より）

石は地球の覗き窓

小木曾 哲 (自然科学系)



私の専門は岩石学です。岩石学などという名前の学問があるなんて、知らない人の方が多いでしょうが、岩石、つまり石そのものは、誰にも身近な存在でしょう。街を

歩いていれば、たいていどこかで石を見かけます。普段は石のことなんて気にとめることもほとんどないでしょうが、みなさんが見かけるとの石もみな、地球の歴史のある時点で、地球（あるいは宇宙？）のどこかで誕生したものなのです。そして、石を調べることで、地球の歴史や、目に見えない地球の内部を覗き見ることさえできるのです。

では、岩石の何を調べたら地球の歴史や内部を覗き見ることができるのでしょうか。その鍵は、岩石のでき方にあります。

岩石には、大きく分けて火成岩・堆積岩・変成岩という3種類があり、それぞれでき方が違います。

火成岩は、マグマが固まってできた岩石です。つまり、マグマが固まる場所で火成岩はできています。では、マグマは、どこで出来ているのでしょうか。マグマは地下から上がってきますので、地下のどこかでできているのは間違いないのですが、地球の地下のどこでもマグマができていたわけではありません。地球の内部は全部融けている、と、誤解している人がたまにいますが、そんなことはありません。地球の内部は、核・マントル・地殻に分かれており、そのうち地殻とマントル（地表から深さ2900kmまで）は固体の岩石で

す。そして、地殻やマントルを構成する岩石が少しだけ融けて地表近くまで上がってきたもの、それがマグマです。ですから、火成岩ができた場所は、その地下で地殻やマントルが融けていた場所である、ということになります。

堆積岩は、砂・泥・生物の遺骸などが、たまって固まった岩石です。では、ものがたまる場所とはどこでしょうか。それは、地球の表面です。地球の表面のあらゆる場所、海底・川底・湖底あるいは陸上でも堆積岩はできています。

変成岩は、すでに存在していた岩石に熱や力が加わって変化した岩石です。岩石に熱や力が加わる場所とはどこでしょうか。一つは、マグマから熱が伝わってくるような場所です。火山の周辺や、温泉のような熱水活動が起こっている場所などです。もう一つは、沈み込み帯といって、日本のように、プレートの下に別のプレートが沈み込んでいるような場所です。プレートの上に乗っていた岩石や、プレートそのものを作っている岩石が、プレートの沈み込みによって地下深くに持ち込まれ、そこで熱と力が加わって、違う岩石へと変化するのです。

このように、3種類の岩石は、それぞれできる場所が決まっています。そして、それぞれの岩石から、岩石ができた場所に関する情報を引き出すことができるわけです。では、3種類の岩石からどんなことを読み取ることができるのでしょうか。

まず堆積岩を先に説明しましょう。堆積岩は、先に述べたように、泥や砂や生物の遺骸などの物質がたまって固まってできた岩石です。そして、堆積岩を構成する物質には、それがたまった場所・

気候・環境などの情報が隠されています。例えば、今から約 20 億年前よりも新しい時代に、赤色砂岩という、赤い砂がたまってきた堆積岩が、世界の色々な場所で出現します。砂粒がたまるのは、砂がたくさん供給される場所ですから、陸地に近い海の底です。砂が赤くなっているのは、酸化鉄の付着によるものです。酸化鉄は、岩石に含まれる鉄分が酸素と反応してできたものですから、赤色砂岩がたまった時代の海の中には、鉄を酸化できるくらい十分な酸素があったことになります。海の中に十分な酸素があるためには、大気中にも十分な酸素がないといけません。しかも、約 20 億年前より以前の時代には、赤色砂岩が見られません。このことは、20 億年前頃を境にして大気中の酸素が急激に増加したことを示しています。つまり、赤色砂岩の存在は、大気中の酸素濃度という一つの環境指標の、時代を通じた変化を読み解く鍵なのです。

次に変成岩からわかることを説明しましょう。変成岩は、火山の周辺や沈み込み帯でできます。ということは、変成岩ができた時代とその分布を知ることができれば、過去の火山活動や沈み込み帯の場所がわかる、ということになります。例えば、北米大陸では、20 億年前より以前にできた複数の岩体（岩体といっても、日本がすっぽり入るくらいの大きさです）の周囲に、20～18 億年前頃にできた変成岩（沈み込み帯でできたもの）が帯状に分布しています。これは、20 億年前以前にあった複数の大陸が、20～18 億年前頃にプレートの沈み込みにより互いに衝突して合体したことを示しています。つまり、変成岩の分布から、過去のプレート運動と大陸成長の歴史を復元出来るのです。

最後に、私の専門である火成岩から何を読み取ることが出来るかを説明しましょう。火成岩は、マグマが固まってできた石です。マグマは、地下にある岩石が一部融けてできるものです。ですから、

火成岩には、地下でマグマができる際の条件などの情報が含まれています。では、地下で岩石が融けてマグマが出来るとは、一体どういうことなのでしょう。地下で岩石が融ける温度（融点）は、深くなればなるほど高温になります。なぜなら、深くなればなるほど岩石に加わる力が大きくなり、そのため、液体よりも固体の方がより安定になるからです。したがって、地下で岩石を融かすには、ある深さにある岩石を、深さを変えずに温度を融点以上に上げるか、温度を変えずに岩石を浅いところまで移動させるか、そのどちらか（あるいは両方）が必要となります。地下にある岩石の温度だけを上昇させるには、どこから熱を持ってこなくてはいけないのですが、地下深くのある場所に熱だけを伝えることは、まず無理です。なぜなら、そんな手段はないからです（もしその手段を思いついた人がいたら教えて下さい）。それでも、実際に地下でマグマができています。ですから、ここでは、岩石が温度を変えずに浅いところまで移動することで融点を越える、ということが起きているはず。つまり、火山の下では、岩石が浅いところに向かって上昇している＝流れていることを意味するのです。言い換えれば、火山の下では岩石（多くの場合はマントル）の上向きの流れがあるわけです。岩石が流れるという、日常感覚では考えられないようなことが実際に地球の中で起きていることを、火成岩の存在が私たちに教えてくれているのです。

以上、岩石のでき方を調べることで分かることの例をいくつか紹介しました。ここで挙げた例は、実はほんの一部であって、岩石から覗き見ることができる地球の歴史や内部の情報は、もっともっとたくさんあります。興味を持った方は、ぜひ大学で、岩石学あるいは地質学を学んでみてください。

（こぎそ てつ）

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
模擬講義Ⅱ担当

夢を見る意味

新宮 一成 (人間科学系)



夢を解釈してみようというフロイトの試みの中には、根本的な一つの意図が隠れています。それは、夢と幻覚と現実とは、本当に区別できるのかどうかということを確認してみたいということです。よく知られているように、精神病にかかると人は幻覚を見ます。ところが、病気にならなくても、人は幻覚を見ることができます。それは、強い欲望が背景にある場合です。何日も何日も、一睡もせずまったく何も食べずに漂流していれば、健康だった人も食べ物の幻覚を見ることになるでしょう。夢も同じように、健康な人に幻覚を見せるのです。われわれは他人には、しばしば夢から醒めろと諭して、自分が幻覚を見てはいないということを誇りにします。しかしそれは本当でしょうか？夢と幻覚と現実の差は、分かり切っているから、もう検討してみなくてよいのでしょうか。そういうわけにはいきません。ですから、人は現実を認識していると自ら思っている場合に、実は自分の欲望に騙されているだけではないかと、問うてみなければなりません。そして、もし夢や幻覚を現実と思わせるほどにわれわれを欺くような欲望が、われわれ自身の心の中にあるのなら、その欲望の正体を突き止めなければなりません。こうして、自分は現実を知っているのかどうかを改めて問い、かつ無意識の欲望というものがわれわれの現実認識に関与していないかどうかを再確認してみることが、フロイトによって19世紀から20世紀の変わり目の年に、提

案されたのです。

フロイトは、この課題を、自分自身の上に課します。われわれは、眠っていたいという強い欲望を持っています。これは無意識の欲望という以前に、われわれが生きていることからくる必然的な欲求です。しかし、ちょうどそれが誘い水になるかのように、そこにもっと精神的な、無意識の欲望が滑り込んでくることを、フロイトは自分自身の夢で示すことになっていきます。たとえば次のような夢を考えてみましょう。

フロイトは、夕食に塩気の強いスモークサーモンを食べました。夜中に喉が渴きます。しかし水を飲むために目を覚ますのはごめんこうむりたい。するとフロイトは、妻がエトルリアの骨董の壺から水を飲ませてくれるという夢を見たのです。ここでは、一瞬でも余計に眠っていたいという前提的な生理的欲求があります。しかし、よく調べてみると、この壺に秘密があります。壺は夢の中でフロイトの目の前にありますが、実はこれは贈り物として人にあげてしまった壺でした。フロイトはこの夢の中で、あの壺を人にあげなければよかった、それは今も自分の手許にあるのだったらどんなにいいだろう、という気持ちが満たされていたことを自ら敏感に察知しました。こうしていささか俗世間的で、口にするのが恥ずかしいような種類の欲望の成就が夢の中には隠れています。これがフロイトの言う「潜在思考」です。しかし夢を後押ししている欲望はこれだけではないのです。もう一段、奥があります。

この壺はエトルリアの骨董品だったのですが、エトルリアはローマよりも先に栄えていて文化的

に高く、ローマの先輩格となって自らは消え去った文明です。フロイトのこの文明への敬意は深く、その敬意は、ローマ教会に対する、自らのユダヤ人としての対抗心と誇りとに結び付いていたのです。すなわち、フロイトが水を飲んだその壺は、ローマより優れた精神性を養うための源泉を提供しているものであったのです。フロイトの骨董収集癖は有名ですが、背景にはこのような古代の先祖への憧憬があるのです。フロイトは夢の中で、ローマよりも優れた文明を担う伝統を身に受けたことになるのです。こうして、夢を産出するにあたっての根源的な資本家である「無意識の欲望」がフロイトの中で成就されていたのです。「無意識の欲望」の核心は「エディプスコンプレクス」です。幼少期におけるこのコンプレクスの形成と消滅によって、人は父祖との精神的葛藤を演じ、やがて精神的な伝統への繋がりを心の中に組み込まれるというのが、精神分析の理論です。

さてそのような「無意識の欲望」ですが、これは本当に、その夢を見た人自身の欲望であると言ってよいのでしょうか？フロイト自身が、ローマ教会を文化的に凌駕することを望んでいたと言うより、フロイトの父や母、さらにその上の世代が、そのように望んでいたということはないでしょうか。実はその通りなのです。無意識の欲望というのは、自分の欲望であることと、他者の欲望であることとの両者が絡み合っているような欲望なのです。両者を切り離すことは容易ではありません。人は、先祖や家の欲望に囲まれて、その欲望の言葉を聞き、その言葉を自らの心の原動力として受け入れて育っていきます。そして、言葉というものの性質上 — 言葉には「主語」があります —、やがてはこの他者の欲望を自己の欲望と見なして、それをそのように作り替えて、生き始めるのです。フロイトとは別の人、ある現代の医学生に登場してもらいましょう。

彼は、夢の中で、野球をしています。暑いので、皆のために飲み物を買ってくる役を自ら引き受けます。飲み物を買に行くと、いつのまにかそのことから離れて、ある物置の屋根の上に来ます。そこに太陽熱温水器が据えつけてあります。そこに寝そべり、もう用事は済んだ、と感じています。その時、母屋の窓から見ている女性の視線と目があって、夢見る人は、引き返していくのです。この夢では、夜中に喉が渇くというフロイトと同じ状況が、即座に、皆も喉が渇いている野球という場面で表され、水を買に行き行為は自分のためのみならず皆のためになされます。そしてこれはいつのまにか、太陽熱温水器の場面が変わります。実はこれは象徴なのです。母の側に戻りたいという気持ちが、この太陽熱温水器で満たされているのです。しかし、現実には母は厳しく彼にこう言うでしょう。母に甘えたりせず医学生としての責任を自覚しなさいと。このことが、女性と目が合って、その場を去るという夢の動きに現れてきます。母に甘えたいという欲望があっても、それは皆の欲望のために水を供給するという行為へと変換されなければならなかったのです。自分の欲望は他者の欲望と織り合わせていかねばなりません。このようにして、人は自分の身体的な欲求と、幼児期から保存している無意識の欲望とを、ともに成就させるために、夢を見るのです。ときにそれは困難になります。その困難は神経症を生みます。フロイトは、夢を作り出す欲望に深く触れることで、この困難を乗り越えることを治療法としました。それは必然的に、自分の目の前にあって自分が現実と思っているものが、実は自分の欲望によってそう見えているだけではないかと疑ってみることを含んでいたのです。

(しんぐう かずしげ)

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス

模擬講義 III 担当

知られざる西域 —トカラ語未解読文書から浮かび上がるオアシス都市の姿

齋藤 治之（認知情報学系）



1. インド・ヨーロッパ語族におけるトカラ語の位置

トカラ語とは現在の中国新疆ウイグル自治区でかつて使用されていた言語で、系統的にはインド・ヨーロッパ語族に属し、しかも多くの点で同じケントゥム語群に分類される西方のケルト語やラテン語との類似性を示しています。因みにケントゥム語群とサテム語群とはインド・ヨーロッパ語の共通の祖先とされるインド・ヨーロッパ祖語の <100> を表す *kmtóm (* は推定形を表わす) の語頭の子音が k- あるいは s- で始まるかの違いによるインド・ヨーロッパ諸語の分類で、前者にはラテン語、ケルト語派、ゲルマン語派、トカラ語（ラテン語 centum、古アイルランド語 cét、英語 hund-red (k>h)、トカラ語 B kante) が、後者にはイラン語派、インド語派、スラブ語派、バルト語派（アヴェスタ語 satem、教会スラブ語 sŭto、リトアニア語 šimtas）などが属しています。東の端に位置するトカラ語がケントゥム語群に属する理由として、この言語の話者たちが西ヨーロッパから中央アジアに至る長い道のりを移動したことが考えられます。トカラ語の言語資料は西暦6世紀から8世紀頃にかけて書かれた仏教の経典の翻訳を主とし、それらの文書は20世紀初頭ドイツ、フランス等の国々が派遣した中央アジア探検隊の発掘調査によりもたらされたものです。その出土地はシルクロード天山南路に沿った東からトルファン、カラシャール、クチャ等のオアシス諸都市で、

東トカラ語（トカラ語 A）と西トカラ語（トカラ語 B）の2つの方言に区別されます。トカラ語は10世紀にはウイグル族に征服され死語になったと考えられています。

2. トカラ語およびトカラ人

このようにヨーロッパでは100年以上前から研究されているトカラ語は日本では研究者以外にはほとんど知られておらず、教科書にも載っていません。トカラ語およびトカラ人は時間的・空間的2つの面で埋没してしまいました。時間的には10世紀に死語になったにもかかわらず、8世紀中頃にトルコ系のウイグル人がモンゴル高原一帯を支配するようになった、ということのみが強調されています。初めてサンスクリット経典を漢訳し、「極楽」など現在我々が用いている様々な語彙を造った4世紀の鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）の母親がウイグル人であると思込んでいる人々もまだかなりいます。また、空間的には、タクラマカン砂漠上の楼蘭からパダル峠を結んだ線の西部はイラン系の民族、東部はトカラ人という具合に、民族による棲み分けがなされていたにもかかわらず、この地域全体に「西胡」と呼ばれるソグド人などのイラン系の民族が住んでいると一般に考えられています。このようにして、トカラ人は我々の観念から姿を消してしまいました。しかし、最近になって様々な一般書においてトカラ人・トカラ語という言葉を目にするようになりました。それらの書物における古代シルクロードオアシス都市の記述は主に三蔵法師として知られる玄奘による『大唐西域記』に基づいています。この文献は

クチャに関して非常に詳しい記録を残していますが、玄奘はその地に約2か月しか滞在しておらず、また旅行者の立場からの報告であり、クチャの人々の生活の細部には及んでいません。これまでオアシス都市の歴史研究者からは「当時のクチャ（亀茲国）で生きていた人々についての細かなディテールが分からない。どのようなものを食べ、何を考え、どのように日々を送っていたのか中国の書物はそうした細かな内容をなかなか伝えてくれない。亀茲国の言葉であるトカラ語で記された資料を読むことが出来れば事情は異なるであろう」と言われてきました。

3. テキストの種類と内容

そこで、本講義では、中央アジアオアシス都市における従来知られていなかった説話の発掘、これまで報告されていない農耕方法、祭祀様式などの実態を浮かび上がらせることを目指しています。扱うテキストのジャンルは：

- ① 実用書
- ② Buddhastotra（讃仏詩）

①の実用書としては、“農耕”に関する未解読箇所（THT3998）、同じく“祭祀”に関する（THT1468）を取り上げます。THT3998では「あまり力むことなく地面が掘られるべきである。力を入れすぎると地面が乾燥して塵が生じる」という箇所に、当時の中央アジアの気候状態を伺い知ることができます。また、“新開地の祓い”が述べられている THT1468 では、「犠牲獣として羊が捧げられ、良い骨が掘られ供物の添え物として頭蓋骨と一緒に燃やされる」という箇所に、仏教が主流を占めていたクチャの地で、ミイエという果実の祭祀は仏教の僧侶（śamāne）が、羊はアドヴァラ（adhvara）、つまりインドで祭祀を執り行う役目の祭官が関わっている、という具合に、祭祀の種類に従ってそれに携わる聖職者の種類が異

なる点が非常に興味深いと言えます。

②の Buddhastotra（讃仏詩）はブッダ（釈迦）の前世の行いを物語っている点において Jātaka（ジャータカ：過去世物語）と位置付けることも可能です。

5:あなたが亀であったとき、あなたは食物として商人たちに自分の体を与えました。

6:皮を剥がされたあなたの体でもって、あなたは慈悲の心で彼らに幅の広い河を渡らせました。

この箇所は欧米の研究者にとっては単なるジャータカの一節に過ぎませんが、日本人には何か思いつくことがある場面です。“皮を剥がされた体（papāsausai kechtsentsa）”や“彼らに幅の広い河を渡らせた（śetkasta cem cāk aurce）”というモチーフは『因幡の白兔』を思い起こさせます。東南アジアにも似たような物語が存在するという指摘がなされていますが、トカラ語 THT3597b 第5、6行は、この説話がその誕生の地からインドや日本に広く流布した可能性を伺わせます。

4. まとめ

先ほど申しましたように、トカラ人やトカラ語に関する事柄は教科書にはまだ載っていません。しかし、学問は日々進歩発展してゆくもので、今高校生のみなさんが習っている教科書の内容は、私が高校生の時習ったものとはかなり違っていると思います。それは、その間に行われた研究により新しい学問的知識が付け加わったためです。大学で行われている研究は今まで知られていなかった事柄を解明し、新しい学問的認識を提供することに関わっています。皆さんもこの京都大学で新しい学問の世界に触れてみませんか。

（さいとう はるゆき）

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
模擬講義 IV 担当

オープンキャンパス学生企画より

感謝

奥田 俊介 (国際文明学系 3 回生)



1. はじめに

今回総合人間学部オープンキャンパス 2011 におきまして学生実行委員長を務めました、三回生の奥田俊介と申します。まず初めに、このように学部の公式広報に紙面を

割いていただいた事に対して教務掛の方々、そして尽力いただいた紀井掛長にお礼を言わせていただきたいと思います。

今回はオープンキャンパスについての感想と言う事で依頼を受けましたので、どのように今回の企画が進んでいったのかについて述べながら感想をお話ししたいと思います。

2. オープンキャンパスの企画開始とその概要

学生が関わるようになって四回目となった今回のオープンキャンパスですが、学部としてはもう一つ学生が関わる行事があります。それは学部で四月第三週目の土日を通して行う「総合人間学部新入生歓迎合宿」というものであり、こちらも今年で四回目を数えることとなりました。今回この両方の実行委員長を務めたのですが、初めて実施した現在人環修士二回生の細川さんという方の凄さに改めて驚かされる程準備は大変なものでした。

最初にこの行事の事について話を伺ったのは合宿が終わった数日後、四月の二十日くらいだと思います。教務掛長の紀井さんから電話があり、合宿の代表と引き続きぜひオープンキャンパスに関してもやってほしいとのことで、快諾した事を覚えています。昨年度もスタッフとして参加して

おり、今年もぜひ関わりたいと思っていたので、この御誘いは本当にうれしいものでした。

そして、今年度は昨年度と準備の方式を変えて「学生実行委員会」を組織し、各企画にそれぞれリーダーを設けて準備を行っていくという形にしました。これは私たちが後々に実現できればいいと思っている、通年で常設という形の「学生委員会」を作って合宿やオープンキャンパス学生企画を実施するという形の一つの先例と位置付けてもいました。

さて、この実行委員会のメンバーは実行委員長・昼の学部企画担当の私、学部紹介パネル作成・寄せ書き担当の萩原君、研究室資料展示担当の棚田先輩、学部紹介ビデオ制作担当の新井君、そして昼の学部紹介クイズ・SASUBE 君コーナー担当の松村先輩、そして一時期教育実習でいなくなった間の松村さんの代打でその後はレギュラーとなった平井先輩といった人員でした。このメンバーで週一回金曜日五限からミーティングを行い、各企画を進めていくこととなりました。各企画の詳細については他の人の記事に任せますが、例年にないほど充実した内容であったことは間違いのないと思います。それは各担当者の能力が高かったこととそれをサポートしてくれた各企画への参加者のおかげであり、正直私は進行状況を報告してもらう時に何をする必要もないというほどでした。これは紀井掛長の言葉ですが、まさに「99 パーセントではなく各担当者が 100 パーセントを出せた」という状況でした。

自分の担当についても簡単に。お昼休みに如何に人を集めるかをテーマに総合人間学部棟前の広場で四つのサークル「Juggling Donuts」、

「MTTR」、「KVK」、「TREVIS」、そして人環博士課程の東田大志さんに協力していただき、パフォーマンスとビラ配りを行っていただくこととなりました。そして実行委員長としては学部長である冨田先生やオープンキャンパス担当の先生であった森谷先生、丸橋先生をはじめ様々な先生方のご協力を仰ぎました。皆さん快く協力していただいたので、非常にスムーズに事を運ばせて頂きました。

3. そして当日

当日は実行委員会が進めていた学生企画のほか、大学の企画として行う研究室公開や相談コーナーに人を集める誘導などがあり、それに30名ほどの学生が、スタッフとして参加してくれました。そのうちの多くの人が主に総人紹介ビデオ、そしてSASUBE君コーナーにおいて協力してくれていた人でした。

当日は、まず朝に紀井掛長からの激励がありましてそこから各自の役割へと移っていったのですが、開始一時間以上も前から吉田南総合館北棟の下から総合人間学部棟裏の駐輪場に四列で並んでもらっても並びきれないくらいに人が集まっていて、驚かされた事を覚えています。

そこからお昼までは少し時間が空いたこともあり、各企画を見て回ることが出来ました。説明会や模擬講義に人が集まるのはもちろんですが、学部紹介のビデオやパネルを来場者が食い入るように見る姿、研究室展示の実験器具を実際に扱う人たちの多さ、そして人の密度がとても高くなっていました。研究室公開のツアーも整理券を配らなければならないほどでした。相談コーナーも賑わっており、さばき切れるのか分からなくなるくらいでした。

そして、自分の仕事であったお昼休みのサークル演技の司会が始まりましたが、正直人の前で話すのが苦手な自分としてはどうなることやら不安だらけでした。しかし、やってみれば何とかなるもので、話し始めれば止まらなくなってしまうほど。機材のトラブルなどもありましたが、全体的には上手く行きました。300人くらいは集まってい

たでしょうか、こちらとしても大きくやってやったぞという実感が心を満たしてくれました。

さて、四時頃には片づけをして全員で締めを行い、1700人以上という全学でもトップの数字を叩き出した事に驚かされました。もともと紀井掛長とは「伝説のオープンキャンパスにしよう」と言っていましたので、まさに「数」、そして全員の力を最大限に出す事によって実現できた「質」で比類ないものとなったと自負しています。打ち上げでもその事をお話ししましたが、本当に「100%」のものができたと自分としては思っています。その後の打ち上げは本当に楽しい時間でした。

4. 最後に

以上、企画開始から終了までのあらましでした。去年のクオリティをいかに洗練させて向上させるか、そして成功へつなげるかということを実行委員長としてずっと考えながら準備をしていましたが、そんな心配は結果的には必要なかったと思います。というのは、周りに本当に協力的でかつ優秀、そして何より「この学部を今以上に盛り上げていきたい」というコンセンサスを持った人たちがともにオープンキャンパスに携わってくれたからというのが一つ。そして、こちらのお願いを快く受けていただき、様々な企画に携わって下さった冨田先生を始めとする先生方、教務掛の方々や学科・学系事務室の西村さん、そして何よりもあらゆることに助言をいただき、実際に交渉をしていただいたり、また相談にも乗って下さった紀井掛長のおかげであると思っています。この場を借りて、このオープンキャンパスをともに作り上げてくださった皆様に感謝を。

最後に、来年以降もこのように総人に関わる行事を引き継いでいってくれることを祈って、締めたいと思います。老兵は去るのみ。ありがとうございました。

(おくだ しゅんすけ)

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
学生実行委員会委員長

面白そうじん・楽しそうじん

新井 翔太（人間科学系2回生）



総人紹介ビデオ製作の リーダーとして

私はプライベートではビデオカメラなど持ったこともないド素人でしたが、大好きな総人のオープンキャンパスという

大きな企画に関わることができる喜びもあり、また紹介ビデオのリーダーとして全権を託されたので、その期待に応えるべく奮闘することを心に決めました。

ビデオ製作は本当に真っ白な状態からのスタートで、人も物もマニュアルも何もなく、あるのは教務掛から借りたビデオカメラと自分のみでした。そのためテレビ製作の本や映像製作の本を読み、金丸先生や先輩方に教えていただき、ネットも参考にし、3月から始動しました。当初は1、2回生のメーリングリスト等を使い一緒にビデオ企画を練り上げていける人を募集したのですが、1人も集まらず焦りが募るばかりで2ヶ月が過ぎました。そこで自分ひとりでやるしかないと覚悟を決め、スタートさせました。

まず、どういうビデオを作りたいかを考えました。目的→目的を達するためのコンセプト→コンセプトに見合うための内容→内容を生かすための構成→構成を引き立てるための編集、というように組み立てていきました。また総人紹介ビデオのターゲット層をこれから受験する潜在群である中高生に完全に絞ることで、お子さんの進路を考えていらっしゃる保護者の方々にまで興味を持って

いただけるようにしようと考えました。

ビデオ上映の目的は、一番新しい学部であるため世間の認知度が低い総人の存在を知ってもらい、総人に興味をもってもらい、総人を好きになってもらい、中高生が総人に入りたいと思ってもらえることです。そのためのコンセプトが「面白そうじん・楽しそうじん」です。この言葉に現れているような総人の魅力があるがままに浮かび上がらせたいと考えました。コンセプトに対しての内容は、オープンキャンパスの学部説明会では語られないような生の総人ライフを見せたいと考えました。総人合宿や、茶話会などの準公式的な面白そう、楽しそうなイベントや、学部長をはじめとした総人の教員へのインタビュー、学生へのインタビューなど中高生にとって未知である大学生活を覗けるようにしたいと考えました。その際には総人の印象を好くするような人選を行い、また具体的な内容を幅広く網羅しようと考えました。構成は、通りがかった人がビデオのどの場面を見ても立ち止まってみたくなるような工夫を考えました。そして全編見ても、何回見ても飽きないようにするため、ドラマ風のストーリーの中に総人ライフを織り込んだものにしようと考えました。ビデオの編集はビデオ撮影が終わってから、ストーリーやシナリオや構成やインタビュー内容を固める、というところまで自分の中で構想を練りました。

あとはこの構想を実現し、遂行してもらうために適材適所のメンバーをスカウトし、ビデオ班を組織していきました。そして構想通りに、2ヶ月

かけ監督兼プロデューサー兼主演兼ディレクター兼総括として、鴨川デルタ・正門前・吉田南校舎内などでドラマ撮影とインタビュー撮影をしました。先生5名、学生約20名（他学部含む）が快く出演して下さり、総人の多様性を映像に収めることができました。その後の編集作業では実務を1回生の丸山君が引き受けてくれたので、私は指示するだけで済みました。このビデオは、「受身で生き方に葛藤している高校生がふとしたきっかけで総人オープンキャンパスに足を運び、様々な‘総人’に触れることで何かを感じ、主体的に頑張っていこうと決意する」という成長ストーリーを軸にし、編集作業を行いました。それら素材を繋ぎ合わせナレーションやBGMやテロップなどを施し、面白くて楽しい(?) 30分超のDVDに仕上げました。

オープンキャンパス全体について

3月からオープンキャンパス学生実行委員会として集まり始めました。金曜日の4時半から、学生企画の進行状況について話し合いやオープンキャンパス全体についての議論を重ねていきました。教務掛長の紀井さん、最高顧問の棚田さん、学生実行委員長の奥田さん、クイズ班リーダーの松村さん、パネル班リーダーの萩原さん、クイズ班の平井さんたちと、わいわい楽しく有意義なミーティングでした。各担当の先輩方が、すばらしい企画を進行させていかれる様は毎回とても良い刺激になりました。またオープンキャンパスの核へアクセスでき、議論もできて楽しかったです。

そして万全に準備を整え、いよいよ8月10日を迎えました。当日私は映像写真係ですべての場所を駆け回りましたが、どのブースにも人が溢れ、総人紹介ビデオコーナーも大盛況で感激しました。「総人に行きたくなった」と言う中高生や「総人いいなあ」とおっしゃる保護者の方々の声が聞こえ、

思わず頬が緩みました。

定員120名の学部の見学に1700名以上の来場者を迎え、全体の誘導や整理が大変でしたが、うれしい悲鳴でした。また非常に暑い中、大事なく皆さんに楽しんでいただけてとても良かったです。

このように成功裏に終わったことは緊張感を持って心配りしてくださった先生方・事務方・学生皆のおかげであり、スタッフ全員の誇りだと思います。また打ち上げの場も用意していただき、非常に充実したイベントになりました。

最後に

本当に沢山の人の協力で総人紹介ビデオが出来上がった事に感謝しています。そしてもっと多くの人の力でオープンキャンパスが成功し、嬉しい限りです。この企画を通じ学年を超えた新しい人間関係が広がりとても良かったです。企画を進める中で、未知の領域を勉強し経験でき自分の視野が一段と広がりました。このような機会に恵まれるところがまさに「面白そうじん楽しそうじん」だと思います。私は学生実行委員会リーダーの中では最年少でしたが、実行委員の皆さんが仲間として対等に接してくださり、次世代へ繋いでいくという考えで、ビデオ製作の全てを任せてもらいました。今度は私が総人の環を広げ、次期学生実行委員長として繋いでいこうと思います。

なお、当日上映したDVDは学科・学系事務室にありますので興味を持たれた方はどうぞご覧になってください。

(あらい しょうた)

2011年度総合人間学部オープンキャンパス
学生実行委員会副委員長・ビデオ班リーダー

総人サイクリング

萩原 広道 (自然科学系3回生)



「大学生になって苦労したことは何ですか？」と尋ねられることがあります。私はこの質問を受けるといつも考えあぐねてしまい、質問者には笑われてしまうのですが、結局決まって「自転車に

乗ることです」と答えています。

とはいえ、この答えも嘘ではありません。私の生まれ育った佐世保はどこもかしこも坂だらけ。自転車に乗ることなんてほとんどなかったものですから、実際苦労したのです。基本的には、進む、曲がる、止まる、の3つの機能しか持たない自転車が、実際に走るとなるとこんなに難しいのかと幾度も顔をしかめました。入学当初は特にひどいふらふら運転で、道行く人に「しらふですか？」と尋ねられることもあったほどです。

今年度のオープンキャンパスで、私は18枚のパネル制作と、当日の相談ブースを担当させていただいたのですが(ありがたいことにパネルの一部は現在も総合人間学部棟1階に展示していただいています)、当日は上の質問を筆頭にいろいろなことを尋ねられました。「総人ってどんなところですか」、「総人で何を学んでいるのですか」と質問される中で、私自身、総人についていろいろなことを考えさせられました。今回はせっかくこのような機会をいただきましたので、僭越ながら、私の総人に対する思いを言葉にしてみたいと思います。

はじめに自転車の話をしましたが、私は「総人

で学ぶ」ことは「自転車に乗る」こととよく似ているのではないかと思います。つまり、「進む」「曲がる」「止まる」の3つが基本ということです。

わかりやすいのは「曲がる」こと、言い換えれば「方向を決める」ことでしょうか。さまざまな学問領域が混在している総人ですが、中には興味の幅がありすぎて方向を定められず、どれも中途半端になっている学生がちらほら。私もそんな学生でした(今もそうかもしれません)。

確かに、いろいろな学問を学ぶことは大切なことです。しかし、ハンドルをきって方向を決めないことには前に進めないように、自分の専門に関しては「よし、この方向で行こう」という指針がないと、まとまりがなく浅い学びしかできません。逆に、進むべき方向が決まっていると、それを軸にしてどっぷり深く学ぶ、学んだ各領域の知識を自分なりに体系立てる、といったことができます。たとえば、スポーツが好きだからそれを軸にする。すると物理学の知識が必要だな、人体の仕組みってどうなっているんだろう、スポーツと経済や社会はどんな風に影響し合うのかな、というように、スポーツという視点でさまざまな学問と向き合うことができ、それが体系化されて「その人なりの総合人間学」になります。方向を決めてしまうと学びの幅が狭くなる気がするかもしれませんが、いろいろな学問を学ぶことと、自分の学びの軸を決めてしまうこととは矛盾しないのです。

次は「止まる」こと。専門を決めきれなくて迷う、進路選択で悩む、卒業を保留するなど、文字通り立ち止まったり悩んだり、とりあえず棚上げしたりすることです。止まること自体、危険は伴

うものの悪いことではありません。それはそれで意味のあることでしょうし、総人は立ち止まって悩むことに対しても比較的寛容な気がします。

しかし私は、休憩の場合はともかくとして、立ち止まるくらいならとりあえず進んでみては？とも思うのです。

ということで、最後は「進む」こと。つまり、自分から積極的に動くことです。総人では、門を叩けばどの先生も快く話をしてくれますし、自分の専門に合わせて他学部の講義も専門科目として履修できます。ユニークで熱意のある学生もたくさんいます。しかしシビアなことに、自分から動かなければ何も得られません。せっかく総人に所属しているのに、積極的に動かないがためにチャンスを逃してしまうのは、とてももったいないと感じます。

いろいろなことで悩み立ち止まるのもいいかもしれませんが、止まっても周りの景色は変わりません。たまたま鳥が飛んで来たり、雲が流れたり。そんな偶然を待つのもひとつの方法でしょう。しかし、とりあえずペダルをこいで進んでみると、見える景色はずいぶんと変わってくるはずです。もしかた一周して悩むことになったとしても、そこまでの道のりの記憶が残っていて、あそこにおいしいお茶屋さんがあったとか、裏道を発見したとか、立ち止まって悩んでいたころよりも自分の方向を決めるための材料ははるかに増えているはずです。

私自身、大学に入ってから何度も悩みました。しかし、積極的に動くこと、動いて情報を集めたり人と交流したりすること。そのアクティブさが自分の武器となり財産となることを、私は総人で学びました。「進む」ことは総人において最も重要な要素だと私は思っています。

自転車も総人も「進む」「曲がる」「止まる」が基本。そして、ハンドルを握ってペダルをこぐのは、私たちひとりひとりです。3つのどれを選ん

で、どの程度で行うのか。その意思決定は乗車しているひとりの人間にかかっています。総人は改良の余地こそあれ、とても素敵な乗り物だと思います。最初はふらふら運転でも、上手に乗りこなしていきたいものです。

ずいぶんと偉そうな話をしてしまいましたが、このような形で自分の意見を述べる機会なんてそうありませんから、真剣に取り組ませていただきました。総人にいたからこそ巡り会えた人がたくさんいて、総人にいなければ触れることもなかった機会がたくさんあります。総人に入学できたことは、私の誇りです。

最後になりましたが、オープンキャンパスの企画運営にご尽力いただいた教務掛の皆さま、教員ならびに学生の皆さまには本当に感謝しています。どなたが欠けても今回のオープンキャンパスは成立し得なかったのではないのでしょうか。そして、一学生である私にこのような機会をくださった広報委員会の皆さまにも、厚く御礼申し上げます。

(はぎはら ひろみち)

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
学生実行委員会パネル班リーダー



オープンキャンパスで使用されたロゴ。
総人新歓合宿でも同様のロゴが使用された。

クイズコーナーと SASUBE 君コーナー

松村 雅治（認知情報学系 4 回生）



私は、お昼休みに行われるクイズ大会と、SASUBE 君コーナーの2つの企画を担当しました。

1. クイズ大会

クイズ大会は、クイズを通じて、学部のことを楽しみながら知ってもらう企画です。クイズ大会は、昨年のオープンキャンパスの時に初めて考案された企画で、私は去年もクイズ長をしました。今年は、昨年よりももっと面白いものを作りたいという思いがありました。去年はパワーポイントを使用し、文章題だけの○×クイズのみでした。しかし今年は、それだけではつまらないと考え、java 言語によるプログラミングを使って、オープンキャンパス用にクイズゲームを開発することにしました。その結果、○×、4 択、ビジュアルクイズ等の多彩なクイズ形式を生み出すことに成功しました。また文章題だけではなく、画像を使った問題も新たに取り入れることが出来ました。なお、ビジュアルクイズとは、時間とともに徐々に開いていくパネルの下に隠された絵や文字を当てるゲームです。

当日は、藤島さん（3 回生）がクイズゲームのプログラムを操作し、賞品渡しや勧誘を三好さん（1 回生）にしてもらいました。ゲーム画面をスクリーンに映して参加者がそれを見て回答するという形式です。最後には「そーじん王決定戦」という頂上決戦を経て、高校生からそーじん王を一人選出します。

ルール：そーじん王決定戦に出場するためには、各クイズで優秀な成績を収めると獲得できる金のカードを 1 枚もしくは銀のカードを 3 枚集めるこ

とが条件です。

賞品：総人の便箋、総人教授の執筆本、金、銀のカード等。

プログラム以外では、このルール作りをしている最中が実は一番幸せなときでもあります。参加者がどれくらいで、どうすれば勝ち抜いていくことが出来るか、各クイズでの入賞ラインをどこに設定するか？金のカードの希少性をどこまで高められるか？銀のカードは 2 枚 3 枚 4 枚どれでそーじん王出場権獲得にするか？時間が掛かり過ぎないか？ゲームバランスの調整次第で企画の面白さはずいぶんと変わります。そこでいかに公平でわかりやすく、しかしそう簡単には突破できないような（簡単すぎると入賞時の達成感が減る）システムにするか？参加する人数の目安がわからないため難しくもありますが、いかに楽しんでもらえるかということに関して、これほど腕が試される場面ありません。今回設定したルールで、皆さんに大いに喜んでもらえたので、その点本当に達成感がありました。

2. Java 言語でゲーム作り

Java 言語は、2 回生のときに受けた「プログラミングの基礎Ⅱ」という授業で初めて勉強しました。その授業での最後の課題は、自由にプログラム作品を作ろうという課題でした。私は、同じく大学生から初めて知った麻雀を題材に、麻雀ゲームを作成しました。半年ではさすがに優れたものは出来ませんでした。1 人麻雀で、あがっているかどうかだけ分かるものでした。しかしその続きの授業である、後期の「数学とプログラミング」という授業の最後には、CPU を交えて 4 人で麻雀が打てるようになりました。

1 年間で形だけでもゲームが作れたという感動

は、その後もプログラミングをする動力源となり、3回生からも自分でプログラミングを続けました。色々調べていくうちに、プログラミングの腕も徐々に上達し、細かな演出も表現出来るようになりました。一つ例を挙げると、麻雀でダメージを受けるときに麻雀牌に雷が落ちるという演出が表現出来るようになりました。

この経験蓄積が布石となり、今年8月のオープンキャンパス用に作ったクイズゲームが出来上がりました。昨年に比べ多くの人に参加してもらい、また口々に「楽しかった」と言われたときの感動といえ、計り知れないものがありました。ゲームやプログラミングに興味がある人にはかなりお勧めの授業です。

3. SASUBE 君コーナー

6月初旬のある日、クイズ大会のプログラムを教務掛の紀井さんや、総人生10人程の前でデモンストレーションをした後のことです。その日がクイズゲームのプログラムを発表する日としては初めての日でした。自分でも自信作でしたので、周りからの評判もよく、「よし！好評だ！」と満足していました。しかし紀井さんはこのプログラムを見て、あることを考えていました。それは、このゲームをお昼休みだけに見せて終わってしまうのはもったいない、何とかもっと多くの人に見てもらいたいというものでした。それで出来たのがSASUBE 君コーナーでした。クイズプログラムを動画として撮り、それを1日中流すというものでした。最初は「なぜ僕のニックネームがコーナー名に？」と、どこぞやの広告のようなことを思いましたが、インパクトがあるということで採用になってしまいました（自分としては少し嬉しいですが！）。

このコーナーの冒頭は、麻雀ゲームを徹夜で私が遊んでいるという話の設定で始まります（麻雀ゲームを出させてあげたいという紀井さんの想いがありました）。

その朝、後輩とその妹が遊びに来て、妹が総人を受験したいから総人のことを教えてといわれた

ので、じゃあクイズで教えましょうとなり、クイズが始まるという内容です。クイズ部では、クイズ大会用に作ったプログラムにさらに付加価値をつけて収録しました。それは、クイズ1問ごとに、クイズの内容についてSASUBE 君となっきい（藤島さん）の2人のキャラクターが掛け合いをするという内容です。動画編集は大変でしたが、自分らしさが出た良い物が出来上がったと思います。

声の収録、絵の調達等、多くの人にお世話になりました。これは人と人とのつながりが作りやすい総人だからこそ出来たのではないかとしみじみ思っています。

4. 最後に

2つのコーナーに関わってもらった総人生・京大生の皆さん、オープンキャンパスの各企画を引っ張った他4名の学生実行委員、SASUBE 君コーナーの提案などオープンキャンパスに本当に尽力して下さった紀井さんならびに関係する教員の皆さん、本当にありがとうございました。頼れる仲間が多いということは本当に幸せです。総合人間学部で学生生活を送ることが出来て、本当に良かったと思いました。

（まつむら まさはる）

2011 年度総合人間学部オープンキャンパス
学生実行委員会クイズ班リーダー



SASUBE 君コーナーで流した動画のワンシーン。
クイズ大会では紹介し切れなかった問題を、SASUBE 君となっきいによる音声解説付きで紹介している。

2011 年度総合人間学部オープンキャンパスの開催を振り返って

棚田 史彦 (人間・環境学研究科修士課程 1 回生)



今年度も「2011 京都大学オープンキャンパス」が、去る 8 月 10 日 (水)、11 日 (木) に実施されました。これに伴い、8 月 10 日に「総合人間学部オープンキャンパス」が実施され、ここにおいて

われわれ学生実行委員会は、学生サークルによる公演、クイズ企画、パネル展示、研究室展示からなる種々の企画を滞りなく実施いたしました。今年度のオープンキャンパスにおきまして、来場者数にも恵まれた結果、それぞれの企画は多数の来場者の方々の好評を博すに至りました。本年度の諸学生企画により、より多くの受験生に対し、総合人間学部の多様性からなる魅力をアピールできたものと確信しております。本稿におきましては私の担当した研究室展示の準備状況について概観したいと存じます。

昨年度のオープンキャンパスの準備におきまして、学部説明会や模擬講義や研究室公開に参加し終えた来場者の方や、それらのイベントに参加できなかった来場者の方が、退屈してしまい総合人間学部のオープンキャンパスから早々に立ち去ってしまうことが問題となっていました。この問題を解決するために、教務掛長である紀井義孝さんは吉田南総合館北棟 1 階西側フロアーにおける総合人間学部の紹介パネルおよび紹介ビデオの展示や、クイズ企画の実施などを提案されました。これらの展示や企画は昨年度のオープンキャンパスにおきまして概ね好評を博し、来場者の方々を総合人間学部棟付近にとどめ置くことに成功しました。本年度におきましてはこれらの企画及び展示

のさらなる充実を図るために、昨年度においては活用されなかった吉田南総合館北棟 1 階西側フロアーの窓際の机の上のスペースを研究室の紹介のために活用することを紀井さんと私との相談の上で決定いたしました。

本年度の研究室展示企画では、総合人間学部の各学系より 2 つから 3 つの研究室に、受験生の興味を惹きつけるもの (研究に用いる標本や資料など) を提供して頂くとともに、それぞれの研究室を分かりやすく紹介する文章を添えて展示することと致しました。ご協力頂いた研究室及びご提供頂いた展示品は以下の通りです (括弧内が展示品)。人間科学系からは戸田剛文研究室 (著書)・永田素彦研究室 (著書及び写真)、自然科学系からは小木曾哲研究室 (岩石標本)・田部勢津久研究室 (ガラス標本)、文化環境学系からは小島泰雄研究室 (著書)・三谷恵子研究室 (著書)、認知情報学系からは立木秀樹研究室 (イマジナリーキューブパズル)・船橋新太郎研究室 (心理テスト)、国際文明学系からは須田千里研究室 (著書)・丸橋良雄研究室 (著書、写真) です。

基本的な作業の流れは、協力して頂ける先生の承認を頂き、その後に研究室の紹介文を作成し、その紹介文を先生に承認頂いたら、実際の展示に用いる展示品を受領し、当日の展示を行い、オープンキャンパス終了後に展示品と紹介文をご返却するという流れでした。先生に承認頂くときに、紹介文に使用する写真素材を提供して頂くことが多かったです。有難いことに、先生方には概ね快く承諾いただいたため、承認頂く作業は順調に進みました。しかし、紹介文の作成は順調に進みませんでした。紹介文の作成には Adobe 社の画像編集ソフトである PhotoshopCS5 の体験版を利用し

ましたが、このソフトを私は全く使用したことがなく、その操作に慣れるのに1週間を必要としました。そして、PhotoshopCS5の体験版の使用期間は30日間であり、それ以降の期日が経つと使用できなくなるという制約もありました。当初は30日でソフトの操作に慣れ、12個の紹介文を完成できると考えていたのですが、6個の紹介文を作成した時点でソフトの試用期間が終わりました。この体験版ソフトは一つのパソコンに一回しかダウンロードできないため、当時の教務掛長であった紀井さんに相談の上で、教務掛が使用しなくなったノートパソコンをお借りし、製作を続行することができました。作成した紹介文の一例をここにご紹介いたします。



この様な形で展示品を提供して下さる研究室それぞれの紹介文を作成いたしました。他の紹介文は、紀井義孝さんと学科・学系事務室の西村良子さんのご厚意により、総合人間学部棟の学科・学系事務室に展示して頂きました。興味を持たれた方は是非ご覧になってください。

私の担当した研究室展示の準備は6月に始まり、8月上旬に概ね終了しました。オープンキャンパス前日には提供をお願いした全ての研究室の展示品がそろい、当日の朝に吉田南総合館北棟1階西側フロアの窓際の机に設置いたしました。当日、私が見回った限りでは、それぞれの展示品に見入っている来場者の姿も見られたのですが、窓際の机付近に設置してある椅子が来場者の休憩

スペースとなってしまう、展示スペースが荷物置き場と化してしまった様子も見られました。それゆえ、来年度、仮に研究室展示を実施する場合には、来場者のために椅子をまとめて設置した休憩スペースを設け、吉田南総合館北棟1階西側フロアの窓際の机には椅子を設置しないようにしたいと考えています。

展示という企画の特性上、当日の朝に展示品を設置してしまうと、終了後の片づけまで研究室展示に関わる業務はほとんどありませんでした。そのため、私はオープンキャンパスの業務時間内におきましては吉田南総合館北棟のアーチ下において紀井掛長とともに来場者の方々の整理を行いました。今回のオープンキャンパスの来場者数は昨年のそれを大きく上回っていたため、私の予想よりも早くに来場者の方が、研究室公開に列を作っておられました。私はそれに圧倒され、戸惑うことが多かったのですが、紀井掛長は臆することなく来場者の方の整理を行っておられました。その姿を傍らで目にし、自分の至らなさを痛感することが多かったです。

本年度のオープンキャンパスは、各種企画及び各種展示の質や入場者数の量において、昨年度を凌ぐものであったように思います。本年度のオープンキャンパスをこの様な形で実施出来たのは、学生実行委員会の奥田君、萩原君、新井君、松村君、平井さんの力によるが多かった様に思います。誠にありがとうございました。そして、蔭ながら学生実行委員会を支えて下さり、各種の便宜を図ってくださった教務掛長の紀井義孝さんと、学科・学系事務室の西村良子さんにもこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと存じます。誠にありがとうございました。

(たなだ ふみひこ)

2011年度総合人間学部オープンキャンパス
学生実行委員会最高顧問・資料展示班リーダー

新任教員より

記憶に残る京都生活に

月浦 崇（認知情報学系）



2011年4月1日付で、総合人間学部 認知情報学系 認知・行動科学関係（人間・環境学研究科 共生人間学専攻 認知・行動科学講座）に准教授として着任し、早いもので3

カ月以上が経過しました。この3カ月は研究室の準備や慣れない授業で怒涛のごとく過ぎて行きましたが、何とか日々の生活も落ち着きはじめ、祇園祭の喧騒に京都の夏の風情を感じる余裕も少しばかり出てきました。

私の専門は「ヒトの記憶機能の脳内メカニズム」の研究です。ヒトの記憶は「こころ」のひとつの過程です。ですから、私の研究は「こころ」の研究である心理学、特に「認知心理学」であると言えます。しかし、「こころ」は人間のどこにあってどのようにしたら見ることができるのでしょうか？これは哲学的命題で、この限られた紙面で答えるにはなかなか難しい問いですが、ひとつの方法として、ヒトの「こころ」は「脳」を通して類推することができますと思います。その意味では、私の専門は「神経科学」でもあるわけです。そんなわけで、文系の「認知心理学」と理系の「神経科学」を合体させた「認知神経科学」が私の専門とする学問分野と言えます。まさに文理融合の学際性を特徴とする、総合人間学部／人間・環境学研究科で積極的に進めるのに相応しい研究分野だと、勝

手に自負しているところです。

さて、ヒトの記憶のひとつに、「自伝的記憶」というものがあります。これは読んで字のごとく、まさにこれまでの人生で自分が主体となって体験してきた記憶のことを指します。この「自伝的記憶」研究の世界的権威に、David Rubin というアメリカの心理学者がいます。彼の研究によれば、お年寄りを対象に自由にこの「自伝的記憶」を再生してもらったところ、総じてお年寄りの記憶は時間が現在から過去に向かうにつれて再生率は低下していったのですが、一部青春時代に体験した「自伝的記憶」だけは幼年時代や中年時代と比較してより良く再生されていたそうです。彼はこの現象を「レミニッセンス・バンプ」と名付け、青春時代の記憶は、人生の中で特殊で重要な位置を占めている可能性を示しています。学生時代に体験する出来事は、人生の中での羅針盤となって私たちを導いてくれるのかもしれません。

私の京都での生活も始まったばかりですが、今まさに青春時代の真最中である多くの学生たちとの時間を、この京都大学で過ごすことにとってもワクワクしています。将来、学生たちの京都大学での「自伝的記憶」の中に、私がほんの1ページでも加わってられるよう、研究・教育に鋭意努力していきたいと思っていますところ です。

（つきうら たかし）

夏の山西フィールド調査

小島 泰雄 (文化環境学系)



「現場で考えること」、フィールド調査とは何かについて考えてみると、こんな素朴な答えに行き着きます。着任の挨拶にかえて、今年の夏に出かけた中国・山西のフィールド調査の際に、行ったこと、考えたことを記します。

場所の歴史について知ろうとすると、書かれた資料が利用できるのは、そこが特別な場所でなければ、ごく簡単で一般的なことに限られます。したがって農村の歴史地理に関心をもつ私にとって、フィールドで多くの時間を費やすのは、そこに暮らしてきた人たちの話を聞くことになります。この夏も、一緒に調査をする中国の研究者の協力を得て、幾人かの村人にインタビューの相手をしてもらいました。

乾燥地域の悩みである土壌のアルカリ化を逆利用して塩の生産を行っていた老農民の話や、半世紀ほど前の人民公社の初期に急進的な社会主義運動を指導していた老幹部の話、「はだしの医者」から診療所を運営するまでに至る女医の半生など、一人ひとりの語る経験に興味は尽きませんでした。ただ山西の方言が判ったならもっと面白かったはず、との思いもありますが。

フィールドでは五感を動員することになります。農家で郷土料理に舌鼓をうったり、鶏や羊の声で目覚めたり、重い腰掛けにおしりが痛くなったり、豚小屋のにおいに閉口したりします。現場

にいることは、全身でそれを受けとめることでもあるのです。地理学で訓練を受けてきた私には、調査と研究において視覚から得られる情報がとくに重要となります。いわゆる景観観察のことです。こう書くと仰々しいのですが、実際にやっていることは単純で、あたりをきょろきょろ見ながら歩き回っているだけです。平遥の街を歩いていると、輪タクの運転手から、「さっきは西門を歩いていたのに、今度は北門にいるのか」と声をかけられました。挙動不審者と見られていたのかもしれませんが。

平遥は世界遺産に登録された地方都市で、城壁や建築など前近代の様態がよく残っていることで知られています。城下町起源の日本の都市が、ゾーニングされた明解な構造を持っているのに対して、中国の都市構造は複雑で、捉えどころがはっきりしません。商店街の並びに官衙があったり、寺廟などの宗教施設は、社会主義の国づくりの中で少なくなりましたが、以前はそこかしこにありました。地図や地方志に記録された都市の構成要素を現実の空間に置き直して把握するために、ひたすら景観観察を行いました。平遥に滞在したのは24時間ほどでしたが、気がつくとその半分以上の12時間あまり歩き続けていました。五十の大台にのった足腰にはさすがに負担となったようで、二、三日は部屋の中の移動でさえ不自由することになりました。

(こじま やすお)

アフリカの土器づくりからみえること

金子 守恵 (文化環境学系)



2011年4月1日付けで、総合人間学部 文化環境学系 文化・地域環境論関係(人間・環境学研究科 共生文明学専攻 文化・地域環境論講座)の助教として着任しました。私は、大学院生のときからアフリカ、エチオピア西南部

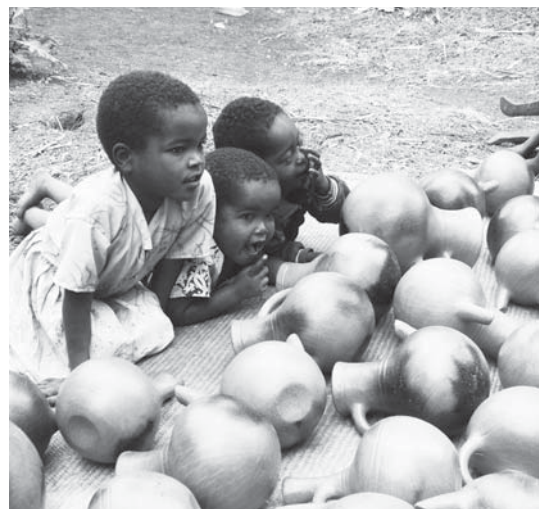
において土器づくりの女性職能集団を対象にしてフィールドワークをおこない研究をすすめてきました。こうして書くと最初から女性土器職人を対象にした研究計画をたててアフリカへと渡航し、研究にとりくんできたかのようにおもえますが、実際のところは、エチオピアに着いてからそこに暮らす人びとが日々の生活で頻繁に利用している土器を目にし、それらの土器を女性職人たちが一定のリズムで身体を動かしながら次々とつくりだしていく様子に魅了されて、フィールドで研究対象を選び直しました。

土器づくりについて研究するというと、土器のつくり方に注目してしまいがちです。私の場合は、女性土器職人の家に住まわせてもらい、見習いの職人として土器をつくりながらフィールドワークをおこないました。そのような経験を通じて、女性職人が素材を入手して形をつくり、焼成した土器を村の市場で客に販売するまでのすべての過程を「土器づくり」ととらえて研究することができました。彼女たちの土器づくりにはいくつかの特徴があります。まず、女性職人たちは20種類もの手指のつかい方を駆使して一定の形態の土器をつくっていました。しかし、土器をつくる職人の娘は、はじめて土器をつくるときからこの20種類の指使いを組み合わせ、母の指示をうけることなくひとりで土器を完成させていました。そして、成形できる土器の種数は、職人の経験年数とは比例していませんでした。最も特徴的なのは、職人のあいだで、これが一番よい、上手なつくり方とされる方法はなく、それぞれの職人の「手（現地語

で aani）」にあわせた多様なつくり方が許容され、いわば個々の職人のつくり方の独自性が尊重されていたことでした。

これらの特徴は、エチオピアの小さな村の数百人規模の女性職能集団について私がみいだしたものに過ぎませんが、ものをつくる技法というものが、その担い手である人の生活のなかで、文化的な行為や社会的な関係と不可分に習得され、実践されながら、変化したり、創造されたりしていることを考えるうえで格好のフィールドだととらえています。現在は、エチオピアの土器づくりでみいだしたことをよりどころにしながら、エチオピアの人びとが生活を営むうえで欠かせないさまざまな技術に注目しています。また、エチオピア固有の栽培植物エンセーテの繊維を用いて、在来の技法に外来の技法を組み込みながら、繊維の有効利用の可能性を村の人たちと一緒に模索しています。私がこれまでおこなってきた研究やいまとりくんでいる研究や活動について、総合人間学部のより多くの学生さんとともに議論できる機会がもてることを楽しみにしています。

(かねこ もりえ)



娘たちの視線の先には、やきあがった土器の底にひびがはいっていないか確認している母がいる。

(2006年・エチオピアにて撮影)

新任の挨拶

佐野 亘 (国際文明学系)



2011年4月1日に、総合人間学部 国際文明学系 社会相関論関係に赴任してきた佐野 亘といいます。「公共政策論ⅠA」、「公共政策論ⅠB」などを担当しています。わたしはじつは「総人」がで

きるのと同時に、「人・環」に入学したこともあって、非常に懐かしいとともに、不思議な縁を感じています。大学院を修了してからすでに10年以上が経過しましたが、新しい建物がいくつか建ったわりにあまり変化のないキャンパスにすっかり馴染んでしまっているとともに、そのこと自体が不思議に思われます。適切な表現かどうか分かりませんが、吉田南キャンパスにはあいかわらずそこはかとなくアナーキーな（いくらか殺伐とした）雰囲気漂っており、たまに時計台のほうに行くと、知らぬ間に肩が凝ってしまうほどです。「総人」や「人・環」のおもしろさはおそらくこのアナーキーさに深く関わっているのでしょう。ここでこれからはばらく教育と研究に携わる者として、このアナーキーさをいかにうまく育てるか（ただし堕落させることなく）、悩んでいる次第です。

わたしの専門は公共政策学なのですが、あまり耳慣れない学問分野かもしれません。ごくおおざっぱに、適切な公共政策を策定するための知の体系のようなもの、と考えてもらえばよいでしょう。当然のことながら、そのような知の体系には非常に多くのものが含まれます。もちろん法律の知識も経済の知識も必要でしょう。場合によっては統計やシミュレーションなどの技法も知っておいたほうがいいかもしれません。さらには、外交問題から環境問題、財政問題から福祉問題まで、さまざまな個別分野の知識についても、最低限の

知識が求められそうです。というわけで、公共政策学なるものは、そうしたさまざまな知識を適切に結びつけ、活用し、具体的な公共政策へと練り上げていくことを目指したものだといえます。わたし自身はそのなかでも、特に、功利主義や卓越主義など、公共政策を支える規範理論について研究しているのですが、純粹に哲学的な研究とは異なり、実際の具体的な政策課題についても知っておく必要があり、「人・環」で学んだことがいまなお活かしていると感じるものがしばしばあります。

そして、こうした数多くの分野にまたがる学問を専攻する者として、わたしは「総人」や「人・環」で学んでいる学生のみなさんには、ぜひともそのチャンスを活用してほしいと願っています。これは公共政策学のような特殊な分野の研究に限ったことではなく、どのような研究をするにしても、またどのような仕事につくにしても、さまざまな分野の学問について知っていることは決して損になることはありません。思いがけないところで意外な役に立つことが必ずあるものです。むしろ、「二兎追うものは一兎も得ず」のリスクも常にあります。実際、特に「総人」の学生がアイデンティティ・クライシスに陥りやすいことは、よく聞くところです。ですが、そうした危険を冒してでも、ここで勉強することには、それだけの価値があると思います。ただし、それは、それなりの知的好奇心と積極性がなければ、実現できない価値です。わたし自身は、できる限り、そのお手伝いができればと考えています。と同時に、非常に楽しみにしています。

(さの わたる)

エネルギー変換分野の新規開拓を目指して

折笠 有基 (自然科学系)



2011年4月1日付けで、総合人間学部 自然科学系（化学・物質科学）専門分野（人間・環境学研究科 相関環境学専攻 物質相関論講座）に助教として着任致しました。私

は総合人間学部、人間・環境学研究科の出身で、入学以来10年ほど、吉田南キャンパスでお世話になっております。10年もあつという間で、とても古くて不夜城だった吉田南総合館が、今ではおしゃれな空間に変わるなど、大学内も大きく様変わりしています。

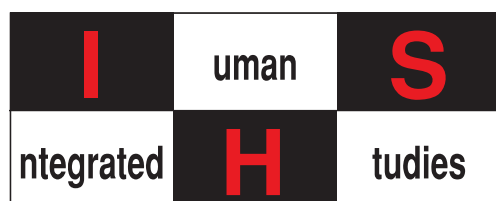
専門は無機化学、電気化学、固体化学です。特に電気化学エネルギー変換デバイス（リチウム電池、燃料電池等）を取り上げ、その反応機構解明を通じて、革新的なデバイス創生へ向けた取り組みをしています。東日本大震災時にも大きく話題となったように、現代社会にとって、エネルギー有効利用の問題は我々人類が直面している大きな課題の一つと言えます。中でも「電気を貯める」、「変換効率を高める」ことは非常に難しい課題であり、世界中で研究開発が加速的に進んでおります。特に、リチウムイオン二次電池は携帯電話やノートパソコン等の小型電源として用いられ、私たちにとって最も身近なエネルギー変換デバイスと言えます。現在、電気自動車や大型電力貯蔵施設に用いるべく、さらなる性能の向上が求められています。この蓄電池のキーとなる技術が、エネルギー変換反応をコントロールすることです。し

かしながら、この反応については未だにブラックボックスな点が多く、明確な指針が得られておりません。今後、高効率なエネルギー変換を実現するためには、反応機構を明確にし、それをデバイス設計に活かすことが求められています。

蓄電池の反応機構が明らかになっていないのは、反応を司る領域が数ナノメートル（ $1/10^9$ メートル）であり、蓄電池の反応進行時にこれを観測する有効な手段がほとんど無かったことに起因します。この問題に取り組むべく、大型放射光施設 SPring-8 や大強度陽子加速施設 J-PARC での最先端の測定手法を用いて、電気化学反応進行時での化学状態を直接的に測定するその場測定の実現してきました。これまでに、反応場である、電極 / 電解質界面でのナノメートルオーダーの特異的な挙動や、反応進行時（非平衡状態）特有の構造情報を捉えることに成功しており、今後の発展が期待されております。

リチウムイオン二次電池は日本で初めて商品化され、近年までは世界 No.1 のシェアを誇ってきました。しかし、現在では韓国に先を越され、国内企業も大きな危機感を持っています。他国の追従を許さないような独自の視点を持ち、エネルギー変換分野を開拓することで、今後の発展に寄与できることを願い、研究に取り組んでおります。

(おりかさ ゆうき)



編集後記

◆『総合人間学部広報』第48号をお届けいたします。今号は夏季休暇中に行われた「2011年度 オープンキャンパス」の特集号となっています。これに加えて本年4月に

新たに着任された5人の先生からご挨拶をいただきました。オープンキャンパスの記事では、実行委員長ならびに模擬講義をご担当いただいた4人の先生に加えて、学生企画を立案・実施した5人の学生の皆さんから寄稿いただきました。1700余名もの参加者が集い、知と若さに溢れた総合人間学部オープンキャンパスの生き生きとした姿が迫るように伝わってきます。新任の先生方の文章からは総合人間学部の学問の多様性と面白さをまさに感じることができます。

彩り深まる秋の日、どうぞ一読下さい。

(M・S)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会